



57歳過ぎでの都市部での 開業で感じたこと

さいたま市浦和区 石井クリニック
昭和47年卒 いしい やすのり
石井 泰憲

泌尿器科のみ単科で定年の直前（埼玉社会保険病院は60歳定年）での開業は、今まで実例が多くないようなので、どうなるか心配でしたが、開業して6年半ぐらゐ経ち、思ったより順調に軌道に乗っています。単科だと周囲の開業医の先生にも警戒されてないようで、どんどん紹介していただいています。ネットなどでの医療情報が溢れている都市部では、内科でもなんでも診ている医師より、実績・経歴のある専門を持った医師の方が患者には信頼度が高いようです。当クリニックでも新患の半数以上はホームページ（<http://www.ishii-clinic.jp/>）を見て来院されています。勤務医時代は、高齢者の患者の比率が少し多かったのですが、開業すると若い患者の割合が増え、患者数は1日平均80～100人位になりました。150人も超えた日もあり、忙しい日々を過ごしています。埼玉県は700万を越す人口、対人口比では医師数が日本で一番少ない県です。大病院に診察に行くと、どこも混んでいて1日がかかりになります。仕事をしている人は忙しく、なかなか休めないのも、待ち時間が短く、夕方土曜日も診てもらえる開業医に来る人が、一般の科でも多いのではと思われます。また、泌尿器科独自のものとして、尿失禁、頻尿、ED、性感染症など、他人にはあまり知られたくない病気を扱っていることもあると思います。たくさん患者のいる大病院では知っている人に会う可能性もあるので嫌だとの思いもあるのでしょうか。また、病院時代から頻尿、尿失禁などの排尿障害にも力を入れてやっていたので、『泌尿器科・女性泌尿器科』と北浦和駅ホームの看板に出しました。このためでしょうか、半数以上が女性の患者で埋まることも少なくありません。

昔、同じ病院の内科部長に「先生、お願いだから、一度、泌尿器科の診察の予診をやらせてくれない。面白い話がたくさんありそうだね」と冗談まじりに話しかけられましたが、開業し

て泌尿器科独特の面白さ、つらさをさらに感じています。人間として恥ずかしい部分を患者は話すのですから、悩みながら勇気を振り絞って来られています。悩みながら来られる病気は、治してあげられるか、対処ができる病気が意外に多いので、少しですがこちらとしてはゆとりを持って診療できます。病気の原因、経過をきくと、こんな人がこんなこと本当にするんだ、人は見かけでは判断できないと驚くこともあり、いろいろな人生ドラマがあります。逆に、つらいのは、どの科でも同じと思いますが、腎癌、膀胱癌、前立腺癌など予後の悪い疾患、難治性疾患を告知する時です。

また、ドクターショッピングしている不定愁訴の患者もいます。しかし、膀胱炎の症状が繰り返されているが、尿の検査で異常がないから精神的なものだと今まで他の医師につきはなされた患者の中には、見落とされている疾患もあります。陰部を診察すると性器ヘルペスが見つかったり、膀胱が膈から飛び出している膀胱瘤などのこともあり、患者の訴えている部位も必ず直接診察してみることが大切と感じています。不定愁訴のなかには東洋医学、漢方薬で改善することもあります。腎結石は指圧で瞬時に患者の痛みは解放されます。勤務医の時は忙しいこともあり、病気（特に悪性腫瘍の見逃しがないように）の方から診ていたような気がします。しかし、開業してからは、息子が卒業した慈恵医大の“臨床の観察研究から脚気の治療法を発見された”学祖・高木兼寛先生の『病気を診ずして、病人を診よ』の大切さを感じています。私は学会、講演会などにもなるべく参加し、気楽に臨床症例などの発表、若い人たちとの接触で老化防止？と思っています。

広い関東では連絡を取り合わなければ、同級生に会うことはないのですが、大学卒業後9年目に東京大学の医学博士の授与式に行った時、受与者は20人くらいでしたが、その中に同級生の

藤樹敏雄君がいたのにはビックリしました。藤樹君とは縁があるのでしょうか。現在、同じ浦和に住んでいます。埼玉県には、長崎大学医学部・同窓会の関東支部を長年にわたって支部長として、支えてこられた井上壽一先生【上福岡総合病院・理事長】（昭和28年卒業）が活躍されていましたが、平成21年にお亡くなりになったのは残念なことでした。実の妹さんも人望の厚いナースで私が勤務していた病院時代から、開業した現在まで一緒に働いてもらっています。

埼玉県は東京に目を向けて生活している“埼玉都民”と言われるサラリーマンのベットタウン地域です。しかし、ベビーブームである団塊の世代がこの5年以内で定年を迎えます。これからは東京まで通勤していたサラリーマンも住んでいる埼玉の地域でのコミュニティーに参加

してもらう必要があります、これは住宅地の都市型老人の課題になるといわれています。私は医師と看護師、薬剤師、介護福祉士などのコメディカル・スタッフで構成されている【埼玉県・老年泌尿器科研究会】の代表世話人の仕事も引き受けています。上京のときどき会う同級生で高知医大の副学長までつとめられた横谷邦彦教授の話では『高知県はこれからは高齢者はいなくなるから若者の県に生まれ変わるんだ。首都圏のドーナツ化した住宅地は団塊の世代が多く残るので、これからは、超高齢者の県になるから、高知県のを見本にして高齢者対策を勉強しておいた方が良いでしょう』と。自分を含めて高齢者に生き生きした生活を送っていただくためにも、地域に根ざした医療を充実させていきたいと思っています。



64歳の誕生日